

平成 22 年 11 月 10 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中齋塾 東京フォーラム

平成 22 年 第 10 回講話

綸言汗の如し

先日、中央区の吟詠大会に参加しました。その際、言葉は怖いなと感じました。主催者の挨拶で、「中央区で詩吟を広めた坂本坦道先生は、二松学舎大学総長をされ・・・」と紹介をしていました。挨拶が終わった後、中齋塾フォーラムでも何度か吟詠して下さった鉄砲洲支部の支部長が確認をしていました。私も聞こえたので、「二松学舎大学は総長はいませんし、坂本坦道先生は二松学舎で詩吟のクラブの顧問をされましたが、学長や理事長にもなったことはありません。もともとの大学は大東文化大学で、そちらの高校の校長先生をしておられました」と伝えました。それが活字で残ると後が大変ですので、主催者側にきちんと直してくれるよう申し入れをしておきました。

「綸言汗の如し」又は「覆水盆に返らず」という言葉もありますが、いったん口から出した言葉はもとに戻らない。鳩山元総理大臣は総理大臣を辞任する際、次期総選挙に出馬しないとっておきながらすぐに前言撤回をしました。何という言葉の軽いことかと思いました。

自分でもここ 1 年で前言撤回をしたらどうかと考えてみましたが、幸いにもしていませんでした。鳩山さんのようにインパクトのある発言を簡単に変えてしまう。総理大臣がそういうことだから、他の大臣も政治家も同じようなものだろうと思います。ただ我々普通の国民は、簡単に前言撤回をするような人生に対する態度をとりたくないし、やらない方がよい。論語の中で言えば、「吾が道は一以て之を貫けり（自分の考え方はただ一つで、それを以て一生貫いているのだ）」と言っていますから、孔子はそう前言撤回などはしていません。ただ、「子南子を見る。子路説ばず。夫子之に矢いて曰く、予が否なる所あらば、天之を厭ん。天之を厭ん。」という文章では、子路に「何であのような淫らな女性（南子）に会いに行くのか」と言われ、苦しい言い訳をしています。孔子でもそうなのですから言い訳くらいはいいとしても、前言撤回はいけませんね。

今年一年を振り返って・・・

では、お聞きします。少し早いですが、一年を振り返って考えて戴きたいと思います。

今年の1月から今日まで一年弱、大きな嘘・人様に迷惑を与えるような嘘について
しまった方？

(・・・手が挙がらない)

では1年間、たぶん嘘をつかなかったと思う方はおられますか？

(・・・多少手が挙がる)

「たぶん」という救済を入れてみました。私は毎晩寝る時に、昨日は嘘をつかなかったかな？ 今日はどうかな？ 昨日は良い日だったかな？ 今日はどうかな？ と、今日一日だけでなく、その前の日も見直しするようにしています。これは自分自身の頭の確認にもなります。まだ物忘れが進んでいないと自分自身を安心をさせています。

今年が良い年だったなと思う方？

悲喜交々、良いこともあったし悪いこともあったでしょう。しかし天秤で量って良いことが多い・悪いことが多いという考え方をしていると、流されてしまいます。自分の主体がなくなってくる。悪いことを意識していると余計に引きずりますので、悪いものはふっと吹き飛ばしてしまっ、来年は全部良いことになっていくように、今年が良い年だったと皆さん手を挙げて戴くとよろしいですね。

今年1年を振り返って、無意識に「有難う」という言葉が出ていた方？ 「有難う」と無意識に言われている方？

(・・・あまり手が挙がらない)

人さまに何かして差し上げると「有難うございます」という言葉が返ってきます。無意識のうちに「有難うございます」が沢山来て、そう言われるのが当たり前だと思えるように見直しをして戴く。「有難う」と言われていても気がつかない場合が結構あります。

今日の論語

では解説を致します。本日の論語は雍也第六 13～20 です。

【十三】 しいわ 子曰く、もうしはん 孟之反 ほこ 伐らず。はし 奔りてでん 殿す。まさもんい 將に門に入らんとして、そのうまむちう 其の馬に策
い ちて曰く、あえおく 敢て後れたるにあら 非ざるなり。うますすま 馬進まざればなりと。

殿(しんがり)というのは、後ろから敵に攻撃されて死ぬかもしれない非常に重要な役割です。孟子反という魯の大夫は、勇士なのですが、自分の武功を自慢をしない、謙虚な

人物です。これは『左伝』に書かれている話だとありますから、現実の話かと思います。

戦いが終わって、孟子反が一番最後に帰って来た。最後に遅れて門に入ろうとした時に、馬に鞭をあてて大きな声で、「私は殿をして遅れたのではない。馬が嫌がって走らないから遅くなってしまったのだ」と言って、殿を務めたことを誇ることはしなかった。

太閤秀吉が織田家の中で重きをなしたのは、殿を務めたからでした。殿をするということとは、周りの人間から尊敬され、一目も二目もおかれる。そういうところで、孟子反は自分の意思で殿をやったのではないと言ったわけです。

今の世の中、孟子反のような人物はいるでしょうか。政治の世界で眺めてみると、民主党の中で殿を務めるような人物は見当たりません。殿というのは、きちんとけじめをつける最後の人ですが、それを自覚しない政治家が多い。例えば、前原さんは国交省大臣になった時に、「ハッ場ダムはマニフェストに書いてある通り中止する」と宣言しました。振り上げた拳を下ろすに下ろせず困っていたところ、外務大臣になりましたから、後始末をしなくて済みました。前原さんはハッ場ダムを放り出して後任の大臣にバトンタッチをし、馬淵大臣は中止を棚上げにしました。おまけに前原さんはそれに対して賛成したということです。何という前言の軽さと感じます。

この文章は、殿をするような人物が今の世の中にいるだろうか、翻って、自分自身が最後のけじめをきちんとつけるような人間になれるかどうか自問自答してみるとよろしい。社員が何か問題を起こす、或いは家族が問題を起こした場合、けじめをつけるのは誰か、考えてみるとよいでしょう。

官僚も政治家も自分で自分の尻拭いをしない。責任はとらない。今の日本の国は、巨大なバスで、運転手が脳梗塞で運転が出来ない状態だと私は思っています。あちらにぶつかり、こちらにぶつかりながら惰性で運転している。座席に座っている人は、運転手が脳梗塞であることに気がつかない。何かにぶつかる度にショックがあるけれども、座席に運転手が座っているから大丈夫だろうと思っている。今の日本の政治家は、ほとんどの人が脳死状態です。生きているように見えるけれども皆ゾンビですから、巨大なバスをともに操縦できるはずがない。どう考えてもバスは崖下に転がり落ちるか、正面衝突する状況だと思います。ですから崖から転がり落ちるとしたら、自分から飛び出す訓練をしておかなければならないと感じています。正面衝突するのであれば、衝突のショックを和らげる方法を考えておく必要がある。すうーっとスピードが落ちて、そのまま止まってくれれば一番良いのですが、そうはならないなと思いつつ、あり得ない事ではないとも思っています。

【十四】 しいわ 子曰く、しゆくだ ねいあ 祝 鮎の佞有らずして、そうちよう び あ 宋 朝の美有らば、かた いま よ まぬか 難きかな今の世に免れんこと。

今の世を無難に過ごすのは、非常に難しいということです。

祝鮎とは宗廟の神主です。

祝鮎の佞とは、口が軽くてその場だけをごまかしていく。今の時代で言うと、菅総理の佞有らずして・・・と読み替えます。

宋朝の美とは、衛の靈公が夫人の南子を喜ばせる為に宋から迎えた美男子です。今でいうホストです。

今の世の中は、口達者な菅総理のような人であるとか、ホストクラブのナンバーワンのような色男のテクニックをもってすれば何とか生きていくことは可能だろうけれども、現実にはそんなものは誰にも要求できないということです。

【十五】 しいわ 子曰く、たれ よ い こ よ 誰か能く出づるに戸に由らざらん。なん こ みち よ な 何ぞ斯の道に由ること莫きや。

外出をする時には、誰でもドアを開けて外へ出る。戸口を通るのが当たり前なのに、なぜ人の道を通る時にはそうしないのか。

人の道を歩む時には私利私欲を棚上げし、世の為・人の為という公の道を通る。そういう考え方で世の中を生きていくべきだということですが、今の世の中では、なかなか要求はできないことです。

【十六】 しいわ 子曰く、しつ ぶん か 質 文に勝てば、すなわ や 則 ち野なり。ぶん しつ か 文 質に勝てば、すなわ し ぶんしつ 則 ち史なり。ひんびん 文質しか のち くんし 彬彬として、然る後に君子なり。

野は田舎者です。史は官職で、国の礼式や書き物を掌る役です。本物の学者ではなくて、自分が覚えた礼式、書き方やルールをもとにして生きていこうという人たちですので、少し形式倒れの役人ということです。

いくら素晴らしい素質があっても世の中のルールを知らない場合は、田舎者になってしまふ。素晴らしい素質があって、その上に世の中のルールを身につければすばらしい。素質も良いし努力もしている、文も質も両方とも相半ばするものが良い。そういう人がいれば君子と言ってもよからう。

君子というのは、なかなか難しいと思います。

【十七】 しいわ子曰く、ひと人のい生くるや、ちよく直なればなり。これ之をし罔いてい生くるは、さいわい幸にしてまぬか免るなり。

孔子が言うには、人間は正直に生きるのが良い。不正直で生きていて何も問題がなかったのは、単なるまぐれ当たりだ。不正直者がまともに生きているのは、自分のやり方が良いと思わずにまぐれ当たりだと考えればよい。

【十八】 しいわ子曰く、これ之を知るし者は、これ之を好むもの者にし如かず。これ之を好むもの者は、これ之を楽しむもの者にし如かず。

何かを知っているという人は、それを好きだという人には及ばない。好きだという人は、それを楽しんでいる人には敵わない。

渋沢栄一さんの『論語講義』の中に、「私は社会事業を楽しむ癖がある。私の顔を見ると、また寄附を取りに来たのかとしかめっ面をされた」という一節があります。社会事業を営む上で、寄附を募るということが渋沢栄一さんは大好きで、人の顔を見れば「事業に寄付して頂戴」と言って歩いたようです。これは自分の道楽、癖でやっている楽しみだと書き残しています。

寄附の話で少し申しますと、会社経営をしておられる方もいらっしゃいますが、今の世の中なかなか儲からない。当然、社長・副社長・役員の人たちはお給料を下げますね。業績が良くなれば給料を元に戻す。こういうことは、かつては当たり前に行っていましたが、今は政府が邪魔をしています。役員のお給料を上げようと思うと、年に一回しか上げられないのです。儲かったから途中でお給料を上げようとしても、税務署は認めません。逆に会社が困っているのに役員給料を削りたいという場合、それも認められない。下げる場合は、会社への寄付金としての扱いになるわけです。役員給料を硬直化させて、1年に1回しか増減をさせない。なぜかと言うと、税金を沢山とりたいたいからです。

渋沢さんは人さまから寄附を取って社会事業を楽しむ癖があったということですが、今の時代に渋沢さんが生きていたら、税務署の取立てにメスを入れたことでしょう。

【十九】 しいわ子曰く、ちゅうじんいじょう中人以上には、もっ以てかみ上をつ語ぐべし。ちゅうじんい中人以下には、もっ以てかみ上をつ語ぐ

べからざるなり。

孔子が言うには、頭の構造が平均以上の人には高度の内容の話をしてよいが、なかなか理解し難いレベルの人には、分からない話はしない方がよい。

いくら言っても物事が分からない人というのは、世の中にいます。そういう人は、どこかで見切る必要があると思います。孔子は「お前はどうしようもないねと言いながら、持っていた杖でピシピシと脛を叩いた」という記述もありますから、全部が全部言葉だけでやったものではないと思います。相手の能力を見抜く必要があるということです。

【二十】 はんちちと 樊遲 知を問う。しいわ 子曰く、たみぎつと 民の義を務め、きしんけい 鬼神を敬して之を遠ざく。これとお 知と謂うべしと。じんといわ 仁を問う。じんしゃかた 曰く、仁者は難きことを先にして、さきう 獲ることを後にす。あとじんい 仁と謂うべしと。

樊遲は孔子よりも 36 歳下ですから非常に若いお弟子さんです。頭のほうは、孔子から見ると物足りないお弟子さんだったようです。その樊遲が、知について孔子に質問をしたので、孔子が具体的に教えています。

孔子が「国民には国家に対する義務を自覚させなさい。神様の祭りには、敬意を払うだけで深入りしてはいけない。これが知というものだよ」と言いました。

次に仁とは何か質問をしたので、
「出来そうもないと思うことや、大変なことを先に実行して、報酬は後から貰えば良い。それが仁というものだよ」と答えてました。

報酬を先に要求するのではなく、仕事が終わって感謝されてから自分の報酬を要求するというのが孔子の考え方ですが、現実には今の世の中は先に報酬を交渉して、「いくら下さい。そうすればやります」という。私の地元で有名な工事会社がありますが、常に裁判沙汰をいくつも抱えています。交渉ごとをする時には、安くやりますから仕事を下さいという営業姿勢です。安いから仕事を出して、結果ころっと騙される会社が多い。おかげであれよあれよという間に、群馬県で売上げがトップに躍り出ました。そんなに安く出来るはずがないのにと思いますが、やはり後から高額な追加工事代金を要求されたというような話も聞きます。安く請け負って、後から追加、追加で報酬を上げていく。孔子のやり方と正反対です。

孔子は最初に金額を決めるのではなく、終わった後で自分の評価をして下さいというものです。どこの旅館か忘れましたが、泊まって満足した分だけ料金を払ってくださいという旅館があると聞きました。

確かに今の日本の値段の決め方は、自由です。先に値段を決めてもよいし、後で決めてもよい混沌とした時代です。ただはっきりしているのは、安いにこしたことはないという考えが幅を利かせています。本当に安いのがよいのか、安いだけで物事を決めていってよいのかということに対する疑問が生まれてきています。そういう点では良い時代に入ってきたなと思います。だんだん孔子の考え方に近づく、その前段階のような気がしています。

自分自身の値段の決め方は、世間の風潮に流されずに、自分が良いと思う決め方をすればよいと考えています。安いにこしたことはないというような世の中の風潮も、だんだん変わりつつあるなと思っています。

知足応分

中斎塾フォーラムの基本哲学は「知足」ですが、ものの考え方としての重みがどんどん増してきたと考えています。足るを知る、<もっともっと>から<ほどほどに>という考え方は、人生の節目や大きな物事を判断する時の判断基準になると思っています。右にしようか左にしようか考えた時に、ほどほどにしておいた方が良いと思って判断すると、まず間違いのないと思います。すでに十分なのに、もうちょっと、ほんの少しだけ欲しいと手を出すと、多分やけどをします。目の前にあると、つい手を出したくなりますが、手を出して自分の欲望通りに取ろうと思った時に、待てよ！ と、知足の考え方が浮かぶ習慣が身につくかどうかです。又、その習慣を身につけるのが肝心なことです。

健康維持の基本原則

今日ご紹介するのは、『定年上手』（森村誠一・堀田力著）という本です。読み易い文庫本です。私は人生の予定表というもので、<やりたいことをやりたいようにやって、人様に迷惑をかけない>という考え方を40代の時に考えて以来、一貫して続けています。これは陽明学の考え方です。人さまに迷惑をかけないという部分は、身内からは反論が出ますが、仮に人さまに迷惑をかけていても自分で気がつかなければ仕方ありませんし、迷惑をかけていないと自分で思っていればよしとします。

私は、<やりたいことをやりたいようにやる人生が良い。尚且つ人さまに迷惑をかけないで世の中の役に立てれば文句はない>と決めてから、三十数年間経っています。それを

裏返したような科白が、この本の中にありました。「健康維持の基本原則は、やりたくないことはやらないことだと思っています」・・・やりたくないことをやると、病気になる。嫌だなと思いつつ、世の中の義理やしがらみでやっていると病気になる・・・私の考えていることを裏返して説明して、しかも健康に結び付けていると思って驚きました。

この言葉を私のホームページの「心に残る言葉」で紹介しました。本日の資料の中にコピーをつけたのでご覧下さい。「やりたくないことの一番は何かと言えば、やはり義理にからむ事柄です。心から行きたいと思う時だけ、出かければ良い。そういう選択肢が私たちにはあるのです」とあります。これも私は実行していました。私は10年位前までは、お葬式の連絡があると行くべきか行くまいか色々と考えました。会社としての付き合いを考えると顔を出しておいた方がよいだろうとか、色々余計な浮き世の義理で行くか行かないかを考えていました。社長業を下りる大分前から、最後のお別れをしたいなと思ったときだけ行くようにしています。純粹に最後のお別れをしたいなと思った時は、どんなに遠くても行きます。ただ、心の中でどうしようかなと思った時は、ためらわず行きません。迷う気持ちがあるのは、不純なもの・利益になるかなという考えがベースにあるからです。ですから今は、お葬式の連絡を戴いた時に余計なことを考えないで、行く・行かないがその場ですぐ返事ができるようになりました。世の中の義理やしがらみでお葬式に行くことが悪いとは言いません。ただ、行く・行かないをずっと決めると気持ちが楽ですから、健康には良いみたいです。

精神的なストレスをどれくらい持っているか。仕事の面でのストレスだったり、家庭の中でのストレスだったり、個人的なストレスだったり、精神的なものがどれほど身体に影響を与えているかということを感じます。精神的なストレスを抱えないようにしたいものです。

新聞記事から・・・

たまたま昨日、朝日新聞を読みましたので、それをご紹介します。1面に「110の事業、仕分け骨抜き 過去に廃止・見直し」とあります。こうやって活字になって出てくると、そういうものかと納得をさせてしまう威力があります。110もの事業は仕分けをしたけれども骨抜きになっているのか・・・と、さらっと流されてしまう。

これを個人で置き換えるとどういう事になるか、自分自身の家庭や会社に置き換えて考えて下さい。例えば奥さんから小遣いを貰っているけれども、どうしても欲しい本があったり小遣いが足りない。奥さんに交渉すると、「今回は我慢してね」と言われたとします。苦

肉の策で、「世話になった人へお返しをしなければならない」という理由で、看板の付け替えをして、事業仕分けのし直しを奥さんに要求します。それが納得できればお金が貰えるかもしれませんが、嘘がばれたら大変なことになります。このように事業仕分けを自分の家にあわせて考えてみるとよい。

これを見ると看板の付け替えです。完全に嘘をついているわけです。看板付け替え型とか、やけ太り型で金額を増やしてしまったり、沢山嘘が出ている。「減縮幅を勝手に圧縮したり先延し」と書いてありますが、要するに嘘をこれだけつきましたということです。これが家庭ならば夫婦喧嘩になります。会社の中でこういうことをしていれば、解雇の対象だと思います。解雇の対象になるようなことをやっているにもかかわらず、怖いのは活字で「骨抜き」と書かれてしまうと、ガス抜きが行われて、すうっと読み過してしまう危険性を感じます。これが新聞の怖いところです。新聞に出るとそれが既成事実として流れてしまう。当たり前のように受け取ってしまうということです。事業仕分けで骨抜きになっているという事実を、既成事実として当たり前を受け止めさせられてしまうという怖さがある。中身は、民間の会社経営であれば、こういうことをしている人間は解雇です。事業仕分けで骨抜きをする、看板の付け替えをしてきた官僚は、降格や配置転換にすべきですし、給料も下げるようなルールを事前に作るべきでしょう。二度としないように痛みを感じるような徹底したルールを作るべきだと思います。

新聞の怖さは、活字によって既成事実化されることです。ですからこの奥に隠されているものを、自分自身の身の上に置き換えて考えてみる必要があります。尖閣諸島の問題も、似たような話になると思っています。

私はこういうことがどんどん進んでいくと、税金を払わない運動が出てくると思います。今後、この特定のものになら税金を使っても良いというような税金の払い方、財源を特定化し、支出を特定化する税金の払い方を求める運動が出てきてしかるべきだと思いますし、そういうものを私は進めたいと思っています。

バスに乗りながら、一蓮托生で落ちて死ぬのは嫌ですから、バスから飛び降りて生きていくつもりです。そうすると飛び降りた所は、ミニ独立国が日本国内にいくつもいくつも出来てくる。そんな流れになるだろうと思うし、又、そういう流れを作っていけばよいと思います。国の中に独立国がいくつも出来ていく。国を構成する要件は、領土と国民と政府です。領土があって国民がいて政府があれば、自分が国家だと言えば、他の国が認めれば国家になってしまう。これは今、ソ連とアメリカがこの考え方をもとに、世界各地に紛争の種を蒔いて自分が面倒を見ている所を小さいながらも独立国家として認めようという動きをしています。それが認められれば、そこにアメリカはアメリカの前線基地を作り、

ロシアはロシアで基地を作るという動きをしています。これを日本国家の中で日本国民がやって悪いということはない。ですからミニ独立国家推奨運動のようなものが突如として生れてくるのではないかと考えております。新聞からそんなことを考えました。

本日の講話は終了です。有難うございました。